読 書 記 録 シ ー ト

読書番号　13　　氏名　　有田　志子

記入年月日　2003 年　6　月　22　日

題目（書名・論文名）　文章読解過程における知識ベースの推論とワーキングメモリ

著者　森下　正修、芋坂　直行

出版社　第６４回日本心理学大会　　出版年　2000　　ページ数　　p760

書籍のありか　北海道教育大（函館校）

関連する箇所の内容

仮説；推論の正確さ、推論構築に関わる文章の読む速度は、①ワーキングメモリの容量、②既有知識へのアクセス効率　から予測可能である。

自分の意見

やっぱり、今までの学習、授業の問題点で、特に数学においては、なぜ、この手続きを使うのかいった視点が欠けていた。手続きだけ見れば、学習者は説ける。

しかし、問題は、どういうときに、なぜ、この手続きを使うのかといったことが理解されていないから、問題は難しくなる。それでは、もし学習者が手続きにおいてなぜを知っていなければ使えないのならば、私のやろうとしている道具によって行為をデザインすることは意味がなくなる。Greene 先生の手続きだけを記述して困ったときに使用するというタイプの本もおかしくなる。

芋坂たちは、言語的ワーキングメモリにおいて、チャンクの生成時に、無関係語が削除されてしまうことを指摘した。

ここから示唆されるのは、スキーマ作りの際に、客観的に、正確に　必要な文を選択できないと、重要な文章でも既有知識に無関係だとドロップしてしまう。